



通信

2025. 12. 19 No. 189 号

公益社団法人 福島原発行動隊

東京都千代田区神田淡路町1-21-7

静和ビル 1階A室 〒101-0063

Tel: 03-3255-5910 Fax: 03-3525-4811

Mail: svcf-admin@svcf.jp Web: http://svcf.jp

転居された方は事務局 (svcf-admin@svcf.jp) まで転居先をお知らせください

12 月（第 155 回）院内集会

12 月の院内集会は下記の通りに開催された。

●日時：12 月 11 日（木曜）11 時～12 時 30 分

●会場：参議院議員会館議員第一会議室（Online 会議を同時開催）

●講師：元東芝の原発技術者小倉志郎氏

●演題：「原発を並べて自衛戦争はできない～原発推進派だった私が何故原発反対派になったか～」

●講師のプロフィール：

小倉志郎（筆名；山田太郎）

1941 年 5 月、東京生まれ。慶応義塾大学工学部機械工学科卒、同大学院修士課程機械工学専攻修了。

日本原子力事業（株）（後に、東芝に吸収合併）入社。35 年間一貫して、原子力発電所の見積・設計・建設・試運転・定期検査・運転サービス・電力会社社員教育などに携わった。東京電力福島第一原子力発電所において業務執行。2002 年 3 月退職。2007 年に季刊誌「リプレーザ」Vol.3 夏号に筆名・山田太郎として「原発を並べて自衛戦争はできない」を寄稿。2011 年 3 月 11 日に大震災/東電福島第一原発が発生して以後、各地で原発の基本的な構造や本質的危険性について講演。2012 年 1 月から同年 7 月まで国会事故調査委員会に協力調査員として参加した。

●講演要旨：



小倉志郎氏は自身の東芝勤務時代を振り返りつつ、入社当時は資源の無い日本に安全な原発を稼働させることにより国の明るい未来を担える一員になれると考えていた。その後、原発の得体の知れぬ危険性を承知するに至った。

小倉氏の主張趣旨は「原発が存在する限り日本の明るい未来像は描けない」ということにある。

福島第一原子力発電所の事故以降、福島県に足を踏み入れたのは国会事故調の調査員だった 2012 年に一度のみであり、今後は足を踏み入れることは無いと解説された。福島の汚染状況（添付写真）は、原子力発電所構内にて厳重に管理されている放射線管理区域の測定値を大幅に超えていることが福島県に行かない理由でもある、と。



2025/11/29 撮影 常磐大熊 1.7 μ Sv

以下に集会会場で配布された講演要項の一部を転載する。

.....

■核分裂連鎖反応を止めても、放射性物質による崩壊熱を止めることが不可能。

■使用済核燃料の中に溜まった膨大な放射能は人類が安全に処理・保管することができない。

■放射線被ばくによる人間やその他の生物の命と健康への影響は世代を超える長期間にわたって続く。しかも、被ばくによる健康への影響には「閾(しきい)値」がない。被ばくで最も怖いのは「内部被ばく」だが、世界の「原子力ムラ」により隠されてきた。

■原発を構成するシステムが複雑すぎて一人の技術者が全貌を隅々まで把握することが不可能。

■原発は「アキレス腱」だらけであり、攻撃される箇所も、攻撃方法も不明であるから武力攻撃から守るの

は不可能。

■自然災害であれ、戦争であれ、原因を問わず原発の重大事故が起きれば、日本は国民が生物として生き延びる環境を失い滅亡する。

■既存の原発は仮想敵国が引き金を握っている核兵器であり、日本はどんなもってもらいたい理由があろうとも戦争をすることはできない。即ち、軍備は何の役にも立たない。

////////////////////////////////////

今年最後の現地支援作業

山田次郎

11月29日から、6名の隊員で福島県大熊町のあまの川農園の支援作業をしました。

今回も、水田の耕作放棄(せざるを得なかった)農地から転換する果樹園やマコモダケ栽培の畑を、イノシシから守るためのイノシシ除けフェンス設置作業です。大変お天気に恵まれて、しかもこの数年での経験から各自の習熟度が上がり、素人とは思えない職人集団となっております。以前果樹園周囲 400mほどを設置したその2倍ほどの畑周囲を設置するのに結局正味3日ほどでミッション完了。そこで急遽予定を変更して大熊町から川内村に移動。いつもの高田島ヴィンヤードでの枝切り作業を行いました。そして12月3日には作業を終えて今年最後の福島現地行動を終了しました。

イノシシ除けフェンス設置作業は、直径2cmほどの鉄棒を地面に打ち込み、この時一人が鉄棒を支えてもう一人(通称ハンマー○○)が重たいハンマーを振り下ろして地面に打ち込みます。そしてネットを別の二人が一人は地面近くの低い箇所、もう一人がネットフェンスの上部を鉄棒にステンレス針金でクルクルと巻き付け固定します。

この巻き付けの二人は既に職人の域に近く、鉄筋工に再就職も無理ではありません。時々一人手が空くとネットフェンス浮き上がり防止のアンカーを大きなハンマーで地面に打ち込みます。これがツライ！

この4人の前方では二人組が草刈りと鉄棒・ネットフェンスを所定位置に運ぶ前処理作業を行っており、総勢6人で着々と作業を進めて、あまの川農園主のエミリーさんも驚きの成果！ところでそんな作業の最中に大熊町防災

無線では「熊の出没に注意」の放送があり、いざとなったら鉄棒とハンマーで戦うしかないか、などと無茶な話を。

大熊町作業が思いのほか早く終わり川内村に移動。そして突然の作業支援の申し入れをしたところ、枝切りを指示されました。レインガードとその上のワイヤーとの間の30cmほどの間の箇所で枝切りをする作業。



ハサミでひたすらチョキチョキ切りますが、思わず「今までで一番楽だ～」と叫んだ隊長。

ところがどっこい、決められた箇所の枝切りを終えると今度はその枝たちをワイヤーから外し(蔓で絡まっている)、下に落ちた枝と共に拾い集める作業が、これがまた起伏ある畑の畝を延々運ぶ作業でシンドイ！



それにしても我々は出世しました。一番初めの頃は先ず阿武隈山系の花崗岩の石拾いから始まり、耐寒アルミガードの設置、畑周囲の草刈り、レインガードや防鳥ネットの張りだしや巻き取り撤去、ブドウ収穫をして来ましたが、とうとう枝切りまでさせてもらえる

事になったのは高品質な労働力提供への信頼を得た証

高田島ヴィンヤードの作業も終えていわき駅まで戻るとき、レンタカーのナビの入力を間違えて新しい道路(40分ほど)を行くのではなく大変な山道を1時間半ほど走る羽目になりました。ところが怪我の功名で紅葉真っ盛りの「夏井川溪谷」を堪能することが出来ました。とにかく圧巻の紅葉でした。

放射能禍で放牧・牧草地がダメになった川内村、そこで村役場は起死回生にワイン用ぶどう栽培を始めた高田島ヴィンヤード・かわうちワイナリー。我々はそんな村企業を

来年も頑張りましょう！



山の端に落ちていく陽の輝きで、ブドウ樹を覆うビニールシートが白い線列になって浮かび上がる。今日の作業が終わる。

＜年末年始＞ 2025/12/27-2026/1/6 お休み
下記の会議・集会はどなたでもご参加いただけます。

- ## 「行動隊の活動方針」

●『SVCf 通信』

1月16日(金曜)発行

- 連絡会議

以下の各金曜日 10:30 開始

1月9、16、23、30

